

列島 リポート

福山市

鞆の浦架橋計画を巡って

藤本寿徳

福山市は、戦後重工業に頼った経済発展を続けてきました。しかし、産業構造の変革、そして不景気の中での街の様子はどこか中途段階で取り残されたまま迷走状態にあるようになります。財政規模、経済規模などが比して小ぶりである以上、今まで都市モデルとして有効に働いてきた県庁所在地のような地方都市からは、常に一步遅れた時間差をもつことは必然なことであります。それでも経済発展が順調な時は、明日の姿を県庁所在地に重ねることができますが、それが本当に街という理解が働いていました。右肩上がりの経済に終止符を打つた

か開発かの二項対立から両立のために、今現在を活かした街づくりのビジョンと、実現のための様々な解決方法に議論が集中していました。それが非常に専門的な内容で驚きましたが、どのジャンルにおいても新しい手法の模索へ焦燥感すら感じ取られるぐらいの真剣な討論であり市民への啓蒙の場などといった安直さに陥ることなく、レベルの高いものでした。特に池田武邦氏による、近代都市への反省とハウステンボスでの環境共生都市の試みをもとにされた鞆でのケース・スタディには、高い関心が集まっていました。また、東京大学

を基にした、最終型の追求よりもデザインガイドで誘導された常に動的な状態とそこで活動にこそ価値を置く視点の活動にこそ価値を置く視点は、観光そのものの意味を問いただし、新しい観光スタイルを予感するに充分な迫力がありました。このような議論の中から、小回りが効くことを最大の武器にし、大都市から較べれば小さな地方都市にでも、逆に人間本来の豊かな住環境の姿を大都市へと展開していくことを願っています。

(参考ホームページ: 「鞆の浦の文化遺産を保存しよう」
<http://www2.odn.ne.jp/tomo/noura/>)



今、今までの都市モデルは有効性が薄れ、実際の市民活動とその舞台である街とがそぐわないものになっている感じがします。筋書き通りに上手に次々と撤退しただけで、街の中心が空洞化するような不安定な状態の上に成立していたのです。

これからは、自然も土地もまだ充分にある地方だからこそ、成立可能な生活環境主義とでも呼べる都市像を摸索し、経済の豊かさのみを指標とするのではない安定した豊かな環境作りへの視点も問われてもいいように思えます。

このような中、絶対的であった行政の論理に一石を投じている問題に「鞆の浦の埋立て架橋計画」があります。

鞆は市中心部から約10km離れた市の南端に位置する唯一の観光地で、瀬戸内海の要港として栄えてきた港街ですが、市を中心部とは異なった歴史的地理的背景があり、独自の地域性を有しています。江戸時代に完成したままの古い街並みは自動車社会に対応できず、細くクランクした道がないものになっている感じがします。筋書き通りに上手に次々と撤退しただけで、街の中心が空洞化するよ

図版提供: 藤本寿徳

